

調査報告

1982年7月23日長崎災害に対する二、三の見解

松下 繁 雄 (長崎市油木町)

Some Consideration of the Nagasaki Disaster
of July 23, 1982

Shigeo MATSUSHITA

はじめに

昭和15年私は、短期現役制廃止第1回一般徴兵でビルマのインパール・フーコ作戦に投入された。この小都市インパール、ビルマ VICTORIA 3053 mを含むアラカン山地は世界最多雨地帯である。その結果、私共、歩兵戦闘中隊240名中生存者4名というところもあった。戦闘戦死は殆んどなく、餓死または病死であった。道路の破損は、今次災害の国道34号線に酷似していた。

第二次大戦中、その名を知られた「テンメン公路」は、雨季の豪雨にかかわらず橋りょうの破損が殆んどなかった。暗きよは、小川にあるものも、ひろく、高い。大きな土石流があっても、つまることがなかった。

1. 砂防ダム

長崎市日見トンネル東口直下のものは、その機能を果し、見事に上流からの土石流をとめている。然し、浦上川に流下した川平町土石流の場合、あまりにも急傾斜であり、流れた土石をとどめ得なかったのである。東彼杵郡虚空蔵山直下、大分県久住山法華院温泉直上等、最近、

数箇所、砂防ダムが完成しているが、いずれも急傾斜地で、土石流を受けるベースが極くせまい。危険である。

2. 石橋群

中島川の石橋群は、他の河川に見られない見事なものであった。江戸中期(1634)以降からのものである。現川の石橋群・妙相寺付近・茂木、木場等のものは自然石を利用した珍しいものであったが、全部流失したのは全く惜しい。

3. 都市構造と排水路

- 1) 中島川と銅座川の河口は戦前別個であった。7.23夜の、あふれた水は、もとのこの両河川にそった形で流下している。
- 2) 浦上川、大橋電停よこの長崎市営大橋球場は河川敷と殆んど同高度であり、昭和初期まで、浜口町一帯と共に水田となっていた。0 m地帯である。現に浜口町一帯では、年一、二回海水が路面を洗う。
- 3) 八郎川(東長崎矢上)
大河川にあつては、その河口はデルタ地帯となり、水路が分散されている。中小河川も同様

であった筈が、いつのまにか、イビはなくなり、二つの河口が一つとなっている。7.23当夜19:00頃、私は下大橋にいた。浦上川の濁水は、新設されたばかりの、この橋脚すれすれであった。球場・体育館・陸上競技場・浜口町等々が水没していることを容易に判断できた。

4. 土石流と赤道、青みぞ

浦上川両側高地のりょう線高地には基盤となる長崎火山岩類の岩石がむきだしとなっている。この下段は畑地、林野を構成し、石つみ、コンクリートで固められた住宅宅地が混在する。これらの畑地、林野は浦上川沖積層に上積みする予備土石である。支流の油木川（谷）ひとつをとっても、各所にくずれ、きれつがある。本流の改修は当然としても、これら支流の砂防ダムも年次計画をたて構築してほしい。

赤道、青みぞの管理は、地方市町村にないという。長崎市の場合、そこが児童・生徒の通学路であったりした場合、整備に助成をしている。

妙相寺木場の土石流あとを見た。基盤岩がむきだしとなり、浅い谷となっている。表層土石が、すべったものであろう。当初、ここに移り住んだのは、この浅い谷からの「わき水」を生活用水として都合がよかったからであろう。

どこもそうであるが、中小河川のその支流のある谷間が多い。その通路側溝、つまり赤溝は殆んど戦前からのもので、浅く、せまく、直角に交叉したところも多い。7.23豪雨が排水許容をこえていたのは事実であるが、これも早急に改善すべきである。

5. 気象通報・異常に対する緊急広報

床上を水が走った。テレビを楽しんでいた部屋に巨大な岩石が降った。何れもなんの前ぶれなしである。7.23当夜、殆んどの家庭が、こ

んな有様だったと思う。あの連続する雷鳴・閃光に、どれほどの人が異常を感じたであろうか。夏空の水平線に高く高く昇る積乱雲……それが、いく層にも、いく層にも重なった様を想像する。この停滞した雷雲が豪雨をもたらしたのだ。そう私が感じたのは、18:00前だと思う。

当夜、担当の気象官・消防士の方々も祈る気持であったろう。然し、あの豪雨と停電の中、どう、何が、できたであろうか。

6. あとがき

具体的な、何かがある。だれかが、何かを専決せねばならない。人は、こんな豪雨は百年に一回位とも言う。それは、あくまで、推測である。植林・砂防ダム・河川改修等々実施せねばならない。同時に、各個人のまわりの整備も、より大切である。

果して、この一文が、今次災害に対する、地学的見解になるか、疑問である。何らかの参考になればと思う。

参考文献

1. 昭和57年7月長崎豪雨の調査報告（長崎大学）
2. 防衛庁戦史
3. 理科年表（東京天文台）
4. 九州石橋をたずねて
5. 東長崎町史
6. NEW WORLD ATLAS

追記

浦上川の支流である油木谷（現、油木町と江里町の一部）の小流は、長崎市立商業高校横で、川幅6m、河床高2.5mから3m程度である。ふだん流水は殆んど生活用水で汚い。然し、河床

高度は、生活用水の流入溝で、1 mもないところもある。その付近の民家では、全部床上浸水となった。電話故障もなく、電灯は光り輝いて、部屋には濁水がうずまき、家人がたち騒ぐ有様は全く異様であった。

当夜(7. 23)、この豪雨で、土石流にまでにはならなかったものの、築堤のゆるみ(本河内高部水源池)、道路横の石垣のゆるみや中ぶくれなどが見られる。国道34号線で2ヵ所、油木町・江里町で各1ヵ所で、その後、殆んど補修されていない。

油木谷の小流でも水があふれ、床下・床上浸水を受けたところでは、次のようなことがなされている。

- ① 道路からの宅地への流入を防ぐブロック一枚ずつを構築したところが多くなった。

- ② 家屋の増改築に基礎工事として従来30cm位のものが、1 m以上にも高くしたところもある。

最後に、石橋群の再建であるが、何れも、殆んど河川両岸が沖積層にある。余程両岸の基礎工事をしっかりしてないと、破損される恐れがある。長崎市矢上にある観音寺内の石橋、同じく手熊町(手熊川)の河口の石橋は、何れも片方が沖積層の上にあるためにゆるみ、危険な状態であった。手熊川の場合、あまりにも危険な状態であったので、とり除かれたが、工事途中で一夜明けた時には、この石橋は河中に落下していた(これは7. 23水害以前の工事)。観音寺の場合、勿論この水害時に落下流失したのである。